

はじめに

改めてご挨拶申し上げます。唯物論的社会契約論研究所主幹の石田力と申します。このたび月刊メールマガジン「唯契の窓」を創刊いたしました。

タイトルの「唯契」とは「唯物論的社会契約論」の略称です。私は本来こうした省略を好まないのですが、「唯物論的社会契約論の窓」という名称ですとあまりにも間延びして語呂が良くない、日本人好みの七文字にするべきだろうということで「唯契の窓」に落ち着いた次第です。

「唯契の窓」は唯物論的社会契約論という新しい社会理論についての理解を広めることと、この理論からみた現在の社会の諸問題について批評を行うことを目的として発行していきます。

読者の皆様の様々な問題意識に少しでも応えられるようにしていきたいと思っておりますので、よろしくお付き合いのほどお願い申し上げます。

□===== [理論解説] =====□
理論解説のコーナーです。

このコーナーでは「唯物論的社会契約論」の解説を行ってまいります。

まず「唯物論的社会契約論」という理論の名称に注目してみましょう。これって、現代の社会にケンカ売ってますよねえ(^^) 理論の名称からなんとなく「この理論は社会と人間の関係を解き明かす理論なんだろうな」という想像はつくかと思えます。ですが、どのあたりが喧嘩ごしなんでしょうか。そう先頭の四文字、「唯物論的」とついているところがまさに喧嘩ごしなんです。と言われてもピンと来ないのが普通でしょう。まずはここから解説をはじめます。

これまでも「社会契約論」というものは存在してきました。それもかなり以前からこの理論は存在していますし、かつ今日の社会を説明する基礎的な理論ともなっております。有名なのはホブズの『リヴァイアサン』(1651年刊)ですとか、ジョン・ロックの『統治二論』(1689年刊)、あるいはその名称もズバリ、ジャン・ジャック・ルソーの『社会契約論』(1762年刊)などが主要な理論書であります。

こうした「社会契約論」の頭に敢えて「唯物論的」の四文字を冠するという

ことはつまり、これまでの「社会契約論」は唯物論的ではない、つまり観念論だと批判することを意味するからです。

では「唯物論」と「観念論」の違いとはなんでしょうか。これらは哲学上の対立概念なのですが、一言でいうとヒトと物の関係についての見解の違いであると言えます。

ざっくりいうと、「観念論」ではヒトの認識が先にあってヒトと物の関係が生じるのだとする立場をとりますが、「唯物論」では物はヒトの意識とは関係なく存在しており、ヒトの意識は外界の反映であるとする立場をとります。もっと単純に言ってしまうと、「唯物論」は科学的思考との親和性が高く、「観念論」は神秘主義的思考との親和性が高いという性質があります(ここまで単純化すると怒る人も出てくるかも知れませんが・・・)。

つまり「唯物論的社会契約論」という名称自体、これまでの「社会契約論」は神話じゃんっ！と言っているに等しいという事なんですねぇ。

ではこれまでの「社会契約論」を観念論だと批判する理由はなんなのか。次回からはこれまでの「社会契約論」の内容についてみていくことにします。

□=====□

●===== [時事批評 道德教育について] =====●

このコーナーでは、唯物論的社会契約論から時事問題について批評を行います。言ってみれば本編が理論解説なら、このコーナーは実践編ということになるでしょうか。

第一回目は今年の春から「特別な教科」とされた「道德」についてです。

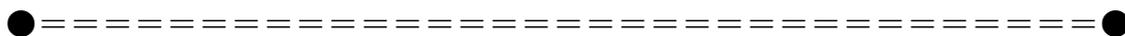
唯物論的社会契約論では科学的な根拠というものを重要視します。道德についても例外ではありません。一般的には道德というと科学にはなじまないもののように捉えられがちですが、そんなことはありません。人としての、あるいは社会人としての行動規範も、その評価には科学的な基準というものが無くてはならないというのが唯物論的社会契約論の説くところです。

いずれ本編でも解説することになりますが、唯物論的社会契約論がもっとも根本的な土台としているのは「生物の存在目的はより安定した生の再生産を行うことである」という科学的な真理です。人類も生物なので当然この存在目的を有しているわけで、さらにその目的を達成するために人類独自の生存戦略を有しています。人々の行動規範の適否は、この生存目的とそのための戦略に対して、合理的かどうかという点で評価されなくてはなりません。これを

道徳の科学性と呼びます。

この見地から文部科学省の中学校過程での道徳教育の概要を見ると、まったく酷いものだと言わざるを得ません。科学的な根拠を欠いたまま、正義や愛国心を習得させるというのは、ある意味思想教育=洗脳教育に他ならないからです。そもそも文部科学省の学習指導要領では、愛国心の対象となる「国」とは何かということについてさえ明確に定義していません。自然や風土に対する愛着は自然に芽生えるものであり、またそのようなものでなくてはなりません。これに対して「国」というのは社会を運営する機関であり、これに愛情を強要するということは、現在の社会の運営方法に対しての盲目的な服従を求めるという事に他ならないわけです。戦前・戦中の思想教育を彷彿とさせる内容で、もはや教育の名に値しないと云わざるを得ないでしょう。こうした思想教育は、程度の違いこそあれ現在の北朝鮮で行われているものと本質的に変わるところはありません。

科学性を欠いた道徳を教育の場に持ち込むなど言語道断。醜い男が自分に対する愛情を女性に強要するような気持ち悪さがそこにはあります。



次回の発行は6月1日を予定しております。